若い世代の介護福祉士による老年文化の受容

～介護福祉士養成教育における一考察～

東海女子短期大学　浅井タヅ子　木俣光江

はじめに

介護の社会化とともに介護福祉士という専門職が誕生して久しい。介護を受ける対象は高齢者がそのほとんどを占めているが、しかし、介護福祉士の人材は若者世代がその役割の多くを担っている。ところが、生活文化における価値観の年代の違いには大きな開きがある。今の若者との社会的・文化的な乖離は、介護の世界でもお互いを理解できないでいる。自然とともに生活を営んだ時代は、知識と経験が生かされていたため、老人にはその存在価値があった。昔の人々は、明日の天候を経験と知恵と感で予報して、その知恵を最も豊富に有する高齢者は当然尊敬されていた。例えば、農作業の種蒔きの時期を教えるなど老人には経験による知恵と役割があった。今日、確かなデータに基づくIT世代に育った介護福祉士はそのような老人を理解して受容することは難しい。すると、介護上どのような弊害が生じるだろうか。高齢の利用者は淋しい思いや、若い世代の介護者に受け入れてもらえないというあきらめ感や、存在価値を否定されたくやしさを心に懐くだろう。また、この二つの世代は家族構造の変化によって、常日頃から接する機会が少なく、さらにお互いが理解できない条件下にある。

介護福祉士養成過程におけるケースワーク原理・原則の教育の中で「まず受容しなさい」と言われてはいるが、はたして現実は受容できているだろうか。手法としての方法論だけでは真の受容には至らない。若い世代の介護福祉士がこのような老年文化を受容するには、まず、どのような内容の乖離があるかを探る必要がある。そして、老年文化を若者世代の介護福祉士に理解させるために、今の老人の生活文化の背景と価値を理解するためのカリキュラムが必要であり、教育課程に組み込むことが望ましいことを説く。

論文は次のように構成した。第1部は老年文化について考える。そして高齢者の社会的存在位置を探る。第2部は学生と老年世代を対象にアンケートを実施して、若者世代と若者世代のそれぞれの文化の認知度を計り、老年世代と若者世代の文化の乖離を分析し、老年世代の心理を探る。第3部は原因と背景を解析し、より良い介護に向けての教育の可能性を探る。

1　老年文化

1－1　老年文化とは

安易に「老年文化」と思いついたが、そももそも「老年文化」とはどのようなものか、老年文化という表現は正しいのかを考えてみた。対極にあるのは若者文化で、老年年文化と若者文化は常に対比・比較される存在である。「老年文化」の先人の研究を探すが、老年文化の定義を掲げた文献が見つからない。そこで筆者は「老年文化」を次のように定義した。

老年文化とは「老人」すなわち「高齢者」がこれまでに形成してきた物心両面の成果で、生活様式形成の内容である。しかし、その文化は現代においては負の価値として評価される場合もある。形成のプロセスは生活や技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治などが関与して形成され、同時に高齢者共通の価値を含む。老年文化はその時代の高齢者の文化である。高齢者の年齢層を形成する「人」は時間の経過とともに入れ替わる。したがって「老年文化」は常に文化の内容が変動する。

1－2　老人の社会的地位

現在の老人は社会的にどのような地位を得ているだろうか。上野千鶴子はその著書の中で比較老年学の片多順の書いた指標を引用して次のように述べている。

『歴史的に見て、年寄りはいつから厄介者やお荷物になったのだろうか。近代産業社会になってからというのがその答である。どういう社会だと年寄りの地位が高く、どういう社会だと年寄りの地位が低いかについて、片多は以下の八つの指標をあげている。

1・社会における老人の地位は近代化の度合いと反比例する
2・高齢人口の比率が低いほど老人の地位は高くなる。
3・老人の地位は社会変動の早さに反比例する
4・定住社会では老人の地位は高く、移動が大きい社会では地位は低い。
5・文字を持たない社会ほど老人の地位は高い。
6・大家族ほど老人の地位は高い。
7・個人主義が進むと老人の地位は低くなる。
8・老人が財産の所有権を持っているところでは老人の地位は高い。

こういう命題を示されると、歴史の趨勢として老人の厄介者視は覆せないことが、学問的に証明されていると判断せざるをえなくなる』[1]

このような老人の地位について、同じように比較の論法で古谷野と安藤は「老年下位文化」という見解を述べている。『新社会老年学』と言う著書の中で「老年」に「文化」をくっつけたところに筆者は注目した。ここでは次のように述べている。

『否定的な高齢者観が支配的な社会では、高齢者自身もまた、否定的な高齢者観にとらわれている。否定的な高齢者観をもった高齢者は、自分が高齢者であるという事実のゆえに自尊感情や満足感の低下を経験する。そして否定的高齢者観にさらされて、みずからの境遇について社会全体の定義とは異なる定義を与える独自の下位文化を生み出す。前近代社会における農業・手工業・自営業と近代社会における工場制工業・雇用労働、前近代社会の大家族と近代の核家族、自発的な引退・隠居と強制的定年退職、長老に対する尊敬と高齢者蔑視の風潮が対比的に取り上げられ、特に日本では儒教的な敬老思想と若者中心文化が対比される。』[2]

このように高齢者を蔑視・厄介者扱いする現代社会では高齢者自身も自分を肯定的に受け入れられないアイディンティティの危機にさらされ、老後問題を構成する。同じく上野は、年寄りと赤子の同一視と言う翁童文化3を社会の文化装置だと捉えて批判的に述べている。例えば女性が将来、「かわいいおばあちゃんになりたい」と思うのは、女が依存的な存在として生き抜いていくための生存戦略である。そのことは、子どものように他人に頼って生き延びていこうとする文化の狡知でもある。上野は、かわいくないおばあちゃんは生きていけないのかと疑問を投げかけて、かわいくなくても生きていける社会でなくてはならないと述べている。

「いまどきの若者」とか「いまどきの学生」とか言われるが、その言葉のなかには他の世代と相容れない乖離を意味する。筆者はそのような乖離の要因として社会生活の様式と内容についてどの程度伝承されているか、どのような認識をしているかを調べる必要があると考えた。そこで、若者世代の学生と老年世代の人々を対象にアンケートを実施した。

2．調査結果

2－1　調査方法

学生への調査はT大学の介護福祉上養成課程の学生45人を対象に質問紙によるアンケート調査を実施した。調査時期は2007年9月下旬で、記入後その場で回収をおこなった。質問項目はそれぞれの家でおこなわれている行事やセレモニーや地域社会のこと、迷信や風習の認知度を調べた。

（倫理的配慮：アンケートに際しては本研究の趣旨を説明して、無記名とし、個人名、固有名は特定できないようにした。特に学生のアンケートの内容に非科学的な内容が含まれるため、段階的に内容やその時代背景などの理解を促し誤

1 上野　2005　23
2 古谷、安藤　2003　19－20 抜粋
3 上野　2005　27

解のまま終わらないように配慮した。）

高齢者への調査はK市の二つの老人福祉センターに通う65歳以上の人、合計46人を対象に質問紙によるアンケート調査を実施した。調査期間は2007年10月17日と19日の2日間で実施し、記入後その場で回収をおこなった。質問項目は学生のときと少し内容を変更したが、おおむね同じ項目とした。それぞれの家でおこなわれている行事やセレモニーや地域社会のこと、迷信や風習の認知度を調べた。そのほか、いまどきの若者に対する感じ方を問うてみた。

2－2　アンケート結果から見えるもの

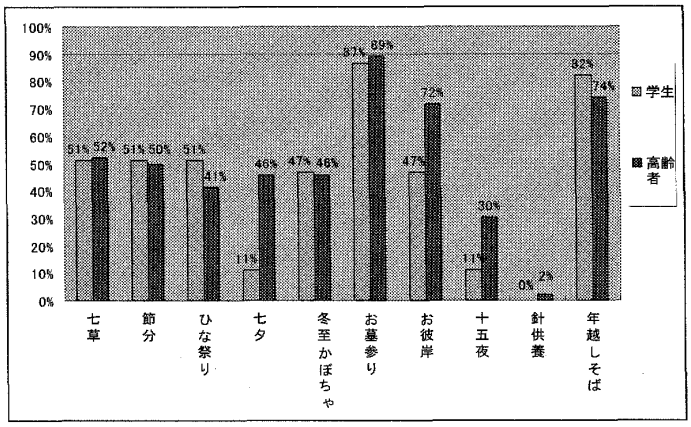

図1　質問：年間行事の実施率（対象：学生・高齢者）

年間行事の実施率について学生と高齢者に質問した結果、次のようなデータになった。図1によると、墓参については、お盆に帰省して墓参をするので核家族でも墓参りする学生が多いが彼岸の行事は（墓参り）その時期に帰省して墓参をすることが少ないためと思われる。「冬至かぼちゃ」はカロチンやビタミン類の不足しがちな時期にかぼちゃを食べ、栄養を補充する意味があるが、輸入や冷凍かぼちゃも含め年中かぼちゃが出回っていてことさらこだわらない。「針供養」にいたっては回答者が0である。花嫁修行として和裁や洋裁を学んだ時代には行われていたが、現在では和・洋裁の学校で話題づくりのために行われている程度である。

七草、節分、冬至かぼちゃ、墓参りは、学生と高齢者のパーセンテージはほとんど変わらない。ひな祭りにおいては子供のときから雛人形を飾る習慣がついていることの延長と思われる。少子化でこどもが大事にされていることも一因と思われる。七夕、十五夜、彼岸では高齢者のほうが行う率が高い。手軽に季節を味わえるので年老いても行っていることの現われと思われる。

表1の「家でもちをつく」では、「はい」が15人あるが、学生の家が農業の場合は自分の家で餅米を収穫するため自宅で餅をつくが、もち米を購入してまでもちはつかない。年中パック詰めされたもちが出回っており、小人数の家族でも扱いやすい1kg程度の袋詰めが手に入る。1個ずつ包装されていて黴る心配がなく手軽であるため「もちをつかない」家が多くなったと考えられる。若水については、昔は水を汲むことは重労働で、しかも水は貴重であった。その思いが若水と言う行事で残った。現在は水道をひねると楽に、そして、ふんだんに水を使うこと

表1・お正月の行事の実施状況（空白部分は質問していない）（対象：学生・高齢者）

	する		しない		NA		知らない	
行事	高齢者	学　生	高齢者	学　生	高齢者	学　生	高齢者	学　生
家でもちをつく	17	15	25	30	4	0		
若水	13	0	16	0	16	1		44
鏡開き	28	9	11	22	7	1		13
〆飾り	38		6		2			
さぎ長	24	5	13	12	9	1		27
書初め	7	2	18	39	21	1		3

ができ、あらためて若水の行事を通して水に対する崇高な気持ちを託す必要がなくなった。

お正月のさぎ長などの一連の行事は門松、書初め、〆飾りは燃やすことで浄化すると考えられて行われてきた。しかし、近年の環境資源保護やCO2削減のために焼却場以外では燃やさない傾向にあり、さぎ長を行わない地域も出現し衰退の傾向にある。子どもたちへ伝承されないのは、子どもたちが夜更かしして、早朝に行われるさぎ長に参加しなくなったことも一因である。

表1では、中部圏では結婚式で花嫁が自宅を出るときに菓子をまく風習があるが、最近は本人達が結婚式を企画したり、式場で結婚式のすべてをとりおこない自宅から花嫁姿で出て行かず直接式場で花嫁衣裳を着る場合が多い。したがって、菓子まきの行事そのものが少なくなり「参加したことが無い」と「知らない」が半数を占めている。誕生にまつわる②③④の儀式は兄弟が少ないために行っていたとしても本人が幼いために記憶に残っていないためと考えられる。七五三は幼稚園や保育園でも行事をおこなうし、さらに、本人の記憶に残る年齢でもあり、さらに、写真によっても記憶が重ねられるため実施率の高い数字が出た。⑥厄年については本人が自発的に行うものではないので親世代が迷信を信じる人や知っている人が減少して厄払いをしなくなって数字に表れた。

表2　人生のセレモニーや地域社会について（対象：学生）

項　　目	参加した	参加したことない	知らない	NA
①結婚式の菓子まき	21	12	12	0
②出産後のお七夜	1	7	37	0
③赤ちゃんのお宮参り	8	25	12	0
④お食い初め	2	7	36	0
⑤七五三	38	7	0	0
⑥厄年の行事	6	31	8	0
⑦葬式の湯灌	13	10	22	0
⑧花祭り	3	4	38	0

表3　地域の宗教行事への参加（対象：高齢者）

項　　目	参　加	不参加	NA
①花祭り（甘茶祭り）	4	29	13
②お宮さん行事	15	22	9
③報恩講	11	25	10

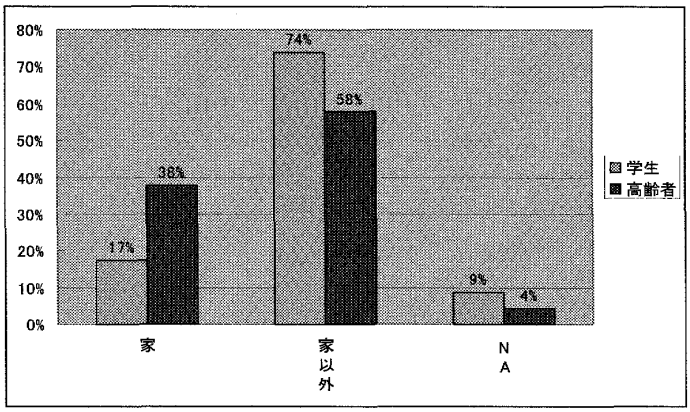

図2　葬式はどこで行うか(対象：高齢者と学生)
(家以外はセレモニー会館など)

表４・葬式にまつわる風習に対する意識（対象：高齢者）

項　目	知っている	気にならない	NA
①葬式のときの湯灌（納棺の前に死体を清めること）	3	39	4
②湯灌の際は水を先に入れて湯を足して準備する	19	19	8
③葬式から帰ると塩を撒いて身を清めてから家に入る	36	6	4

表５・その他の迷信や風習について（対象：高齢者）

項　目	気になる	気にしない	知らない	NA
①苦餅（12 月 29 日に餅をつく）	31	10	0	5
②祝い事にナイフや包丁などを贈らない	27	6	7	6
③くしを贈ってはいけない（苦と死）	28	7	6	5
④元旦に掃除をすると一年間ずっと掃除する	24	16	2	4
⑤出針はするな（出かける前の針仕事）	22	11	10	3
⑥さぎちょう（どんどやき）の書初めの燃えカスが高く上がるほど習字が上達する	15	17	9	5
⑦着物は左前に身頃に合わせて着る	37	6	0	3
⑧朝の蜘蛛（くも）は殺すな	24	13	6	3
⑨夜に爪を切ると親の死に目に会えない	24	18	2	2
⑩厄年	29	11	2	4
⑪新しい靴を夜おろしてはいけない	26	16	4	2
⑫食事の配膳（ご飯は左、お味噌汁は右など）	23	10	0	13
⑬夜に口笛を吹くな（泥棒・幽霊が出る）	23	15	5	3
⑭きたまくらで寝る	35	10	0	1
⑮ご飯にはしを立てない	38	12	1	5
⑯元旦にお金を使うと貧乏になる	19	18		2

表６・いまどきの若者で気になること（対象：高齢者）

項　目	気になる	気にしない	知らない	NA
①人前で平気で化粧をする	43	3	0	0
②立てひざで座る	41	3	0	2
③地べたに座り込む（地べたりあん）	39	2	2	3
④ズボンの腰履き（半分お尻を出して履く）	38	2	1	4
⑤どこでもかまわず携帯電話	41	3	0	2
⑥ガングロ（真っ黒な顔のお化粧）	37	3	2	4
⑦いまどきの言葉（やたら省略する）	32	3	2	9

表４・５では風習や迷信に対しての高齢者の考えは、約３分の１は気にしていない。それは、今回のアンケート調査の高齢者は、居住地域が1960年代前後に建てられた分譲住宅やアパート居住者が多く、また、都市部への通勤圏にあるため合理的な考えの人が多いこともこのような結果がでたと思われる。それでもおおかたの高齢者は今でも気にしている。ましてや農山村地域ではもっと高い比率になると思われる。

２－２　結果を示す時代的背景

アンケートから生活様式の変化による老年文化の継承の難しさを痛感する。現在、介護の対象になっている高齢者は大きく分けると２つの時代を生き抜いた人々である。その時代・時代の教育や社会的影響を受け、それが自分の生活スタイルやアイディンティティやものの考え方を形成している。

1910年代生まれは大正デモクラシー華やかなころに幼児期、思春期を過ごしながら、祖父母や両親から明治時代の気風も受けついでいる。1930年代生まれは軍国主義教育を幼児期、思春期に受け、1943年に第二次世界大戦に突入すると「一億玉砕火の玉だ」「贅沢は敵」と日本国が戦争に勝つ為にすべてをなげうった時代である。1944年９月の筆者の誕生日について記述してある母の日記を引用すると「誕生日を祝うものが時節柄、手に入らない」とある。たぶん赤飯用の小豆やもち米をさすのであろうが、このように庶民の些細な催しも行うことができない時代が５～６年続き、この時代に多少の文化の伝承がうすれた。戦中はすべての秩序を保つために従順、命令には従うことを強要された。たとえば学校では教員の言うことは絶対正しく学生が意見を言うなどはもってのほかであった。家庭では女性、ことに嫁は忍従の日々を過ごし、姑が黒を白と言ってもあがなうことはできない。ところが1945年の敗戦で今まで信じていた価値観や世の在り様が一変した。現在の70代の女性の口からよく聞く言葉は「姑にさんざん仕え、今は息子夫婦（1950年～1960年うまれ）に遠慮して暮らす、割に合わない時代に生まれた」と嘆く。姑に仕えた時代の今の高齢者は、代々の家風やしきたり・因習も受け継いだ。しかし、息子夫婦（1950年代～1960年代生まれ）は代々の家風やしきたり因習も受け継ぎが少ない。したがって現在の本学の学生の年代はその息子夫婦といわれる世代に育てられてきた年代にあたる。アンケートにでている結果はそれをものがたっている。祖父母と同居の学生は先代から受け継いでいる行事を継承していることが伺える。「行う、知っている」などの答えをした学生はその多くの学生がどの行事も行っているし、「行っていない、知らない」と答えた学生はどの項目も「知らない、行っていない」の回答になっていた。しかし、この伝承も家族構成や親の職業によって行う行事が違う。ところが、節分・ひな祭り・七夕は同居家族に子供がいる場合は幼稚園や学校で行った行事が家庭へ逆に入ってくることが多く、先祖から受け継いだ行事としてではなく外から逆に家庭へ入ってくる場合もある。スーパーマーケットや商店が節分コーナーを設け、豆や鬼の面を売っている。ひな祭りについても「嬉しいひな祭り」の歌とともに、あられや白酒、雛人形を売る。初孫が生まれると雛人形や五月人形、こいのぼりを祖父母が贈ることにより行事として行われる。

最近始まったのがバレンタインデーのチョコレートや節分の恵方を向いて太巻き寿司を食べる「恵方巻き」、ハローインのさまざまなグッズなど、伝承も商業ペースで宣伝することにより行事として定着してゆくことが分かった。

アンケート結果から見ると多くの行事が半数以下の家庭では行っておらず、習慣や風習が伝承されにくい、またはされていないことが伺える。現在の高齢者が風習や文化を身につけた時代は、年間を通して行事を行う中で祖父母や両親、近親者、近隣の人々の指導を受けながら行い、身に着けていった。年間行事を行うことで思考もそれに沿って形成され、体でも覚え育っていった。しかし現在では地域や家庭で催される行事が簡略、省略され、学び・受け継ぐ機会が激減している。

経済活動のイノベーションは家事労働の地殻変動を招いた。家庭に於いては多くの家事が商品化されたり機械化されているため、それが増

大するに従って、家族が力を合わせて行ったり、親から子へと、ともに行うことで伝承される種々の伝統がそこで途切れてしまう。

当然、家庭でなされていた家事や諸事が商品化や機械化されている内容を下記に羅列する。

・掃除はハウスクリーニング業者が年に何回か徹底的に掃除をし、普段は家族が暮らしよい程度に表面を簡単に行っている家庭も出現している。障子も少なくなり張替えも業者やシルバー人材銀行の作業員に張ってもらう。

・洗濯は洗濯機の普及とクリーニング業者の増大によりワイシャツ１枚が100円程度と安く、洗って干して、アイロンがけしてと煩雑な内容を踏まねばならない作業が缶ジュース１本分で済む手軽さである。

・季節の衣類管理は、昔は、季節の変わり目の衣類の準備は主婦の大仕事であった。和服を着ていた時代で、冬物を洗って仕立て直したり、仕立てに出したりと一家の衣服管理は大仕事であったが、現代は安く衣類が手に入り、洗濯機の普及と化学繊維の普及で洗うことが簡単で、洗ってもシワになりにくい、虫に喰われることも少なく、保管も簡単である。

・食事は、外食産業の発展や練り製品、半調理品、冷凍食品の普及により安価で満腹感のある食事が手軽にできる。都会では包丁まな板のない世帯が何割かあるようである。忙しい現代人にとってのファーストフードは生活習慣病や食品添加物などの問題を除けば便利な存在である。

・おせち料理はデパートや高級料亭、料理屋で作っていて、それを購入する家庭も増えている。生活協同組合（COOP）の共同購入ですら10月下旬から注文をとり始めている。手作りや無添加を進めていた生協ですらこの状態である。昔はあれこれ材料を吟味して年末は何日間かおせち作りに費やしていたが、味はともかくとして見た目も華やかな料理が元旦には味わえる。家庭の味やお袋の味は今日ではパッケージ（袋）の味になっている。

・出産は陣痛が始まると男・子供は産室に近づかないように言われ、お産婆さんを呼びに行き湯を沸かしたりして家族総出で体制を作り出産の喜びを共有し、命の大切さやいとおしさを育んできた。

・育児は兄弟が多い時代上の子供が下の子供の面倒を見るのが当然であり、やさしさや思いやり、幼子の状態把握など子供なりに身についたが、生活パターンの変化、女性の社会進出、少子化などに伴い乳児保育や夜間保育などが代替している

・介護もしかりである。

・結婚式は自宅で化粧、花嫁衣裳を着、花嫁さんを作る。家から出るときに菓子を撒く（近所にお世話になったお礼と結婚して実家を出てゆく披露の意味がある）花婿の家では結婚式を行いついで宴会になる。料理や酒の準備は女性の仕事でありその中で文化が継承されてゆく。

・法事の準備は、現在はお寺で供養を済ませ、料理屋へ行き会食をするパターンがほとんどであるが、20年ほど前までは家庭ですべて行ってきた。法事などの行事があることにより家中の大掃除ができ子供も働き手の１人として頼りにされたものである。座敷やそれに続く部屋の戸やふすまをはずし家具を移動するので家の隅々まで掃除ができ、不要物の整理ができた。要、不要の判断もそれを見て学ぶ。法事の食事は大勢の人が１度に食事ができる大皿盛りの献立や炊事方法を学ぶ機会でもあった。親戚、おじ、おば、嫁いだ娘、息子などが当日には手伝い、特に女性（おばや嫁いだ娘）は台所でご馳走を出す算段に右往左往するがそのやり取りの中でその親族の家風や習慣を次代につないでゆく場でもあった。

・葬式は、村八分とは葬儀と火事は村の仲間に入ることができるが、祝い事や祭りは仲間に入れないのである。葬儀では、遺族は別れを惜しんだり雑事に追われるので近隣の男性は墓穴堀り、花立をつくり、しきび採りなどを行い、女性は「おとき」（葬儀の日の昼食を会葬者や親族に提供する）を準備した。このことを通して地域の伝統や文化風習が継承されてゆく。結婚式と法事が家の伝統や風習、家風の伝承の場であるならば葬儀は村の風習の継承の場であった。

このように伝承されてきた文化が失われてゆくが、それにともなって普段の忌み嫌われてきた風習も踏襲する必要がなくなり、介護される場合にはやって欲しくない援助を受けることにもなる。迷信や風習は以外にもそれぞれに対して科学的な根拠や合理的必然性が内包されていることが多いということに気づくが、それを学生や若い介護福祉士に説明することで、闇雲に高齢者の考えや習慣や価値観を否定することはなくなるだろう。

2－3　老年世代と若者世代の文化の乖離

調査結果により、生活文化に関する認識の隔たりがあることがわかる。それらをまとめると次のことが言える。

1）核家族化が進み、伝統が受け継がれない。それによって因習を守る要素がない。
2）ほとんどの行事や慣習が伝承されていない。知識として教えられていた場合でも、それらが実際に実施されていないため現実化できない。
3）宗教行事の衰退、不参加、伝承の下降傾向がみられ、儒教的な老人を敬う意識が無くなる。
4）地域性においては農村地帯でも生活の中身は都会化している。

これらのことは老年世代にとって、行事や風習が形骸化している中では老人の役割が喪失、地位が下降する。それによって老人の人間関係、社会関係が減少して、老人にとっての社会的ネットワーク規模の縮小、または役割に依拠しない関係（家族等）にも影響を与える。

3　老年文化と介護

3－1　介護への影響

今日の介護保険施行のもとでは、20歳ぐらいの生活経験が少ない者が生活支援・自立支援の専門職となって現場へ出向くわけである。意識の乖離は、利用者の生活、あるいはこれまで信じてきた価値を否定する場合もあり、介護の質に影響を与える。高齢者を肯定的に捉えてその職に就くとすれば、当然、サービスの質に影響して質向上につながる。逆に否定的な高齢者観は質の低下をもたらす。ここに黒井の興味深い見解があるが、それは次のようなものである。

『専門職を含むサービス提供者の高齢者観は、一般の人々と大差なく、全般に否定的で、重介護を要する高齢者にサービスを提供する機会の多い人ほど特に否定的だとされる。そこで欧米の医学・看護教育においては、専門的な知識・技術の教育と同時に、学生の高齢者観を改善する試みが続けられてきた。その結果、学生の高齢者観の改善を図るには、講義のみでは不十分で、高齢者と接する機会を提供することが有効とされてきた。しかし、専門教育において特に注意を必要とするのは、高齢者と接する機会（特に配属実習）が、かえって否定的な高齢者観を強化するという「ナーシング・ホームの落とし穴」である。専門的な知識・技術の修得を目的とする配属実習では重介護を要する高齢者にふれさせることが不可欠であるが、そのような専門教育のプログラムでは、しばしば否定的な高齢者観が強化されることがある。そこで、学生の高齢者観の改善のためには、重介護を要する高齢者にふれさせる前に、在宅の健康な高齢者と接する機会を提供することが必要とされている。』[4]

3－2　解決の糸口

若者世代にとって老年文化をなかなか理解できないでいるということは前述のとおりである。学生は老年世代を、目で捉えた表面的な面だけを受けとめようとする。老年の問題を考えるなら、同世代における横の関係、時間の軸ではなく空間の軸にそった検討が必要である。老年学の黒井は次のように述べている。

『老年と青年の関係のなかで、英知は伝達できない、老人の口と若者の耳は対応することなく終わると考えるのは、人間を世代に分けて見ようとした時に生まれる批評である。つまり、時間の軸によって人と人との関係を縦に捉えようとしても、そこには断絶しか見出せない』[5]

すなわち、単に年をとった人として対極に構えるのではなく、老人の横の関係や時代、生活文化を知ることが大切である。主観的価値観の

4 黒井　2006　23
5 黒井　2006　57　一部抜粋

共通次元を意識することである。利用者理解のための要素として共感することが必須となるが、その要素について考えてみたい。

共感について鷲田清一は現象学的視点から次のように述べている。『お互いがお互いの生い立ちを語り合い、自己と他者の生い立ちとの出会いなおしを通じて、自己を安心して再構築していく場が必要である。そこでは自己は沸々と湧き上がっては消え行く生の共振によってつねに変化するものであり、それゆえに互いの配慮のもと、自己を承認してくれる他者にそれを安心して開くことができる。そこに存在するだけで空間をつくっている。』[6]

介護者と非介護者が精神的に価値を共有し理解することによって、老人の意欲やエンパワーメントを引き出すことができる。老人のアイデンテティを受け入れ、それを考慮した介護を行うことで、より質の高い介護ができる。そのためには、介護教育課程の中に、老年文化を理解するための具体的教育を盛り込む必要がある。

3－3　教育への期待（介護福祉士としての専門職の高齢者観）

今日の介護福祉士の養成課程においては、高齢者の特徴を捉えるとき、目に見える「身体」を中心に捉えようとする。そのことを黒井は次のように述べている。『最近では、ソーシャル・サポートに関する研究のなかで、主観的幸福感が、「精神的健康」（実際には、ほとんどの場合、抑うつ傾向）と置き換え可能な結果変数として使用されることが多くなっている。』[7]　これは介護養成教育に看護学の分野の教員が多く、介護福祉学を看護の延長線上にある介護として捉えているからだと筆者は考える。そこには「福祉」がもつ本来の価値が抜け落ちていることに起因する。特に「介護過程」において主観的要因による関連が解き明かされてニーズへと展開されない限り、利用者の幸福には至らない。

「介護過程」は教育上、重要な位置づけを持つ。介護過程で利用者の介護支援を学ぶわけだが、高齢者をどのように捉えるかによって支援の質が左右される。

例えば、筆者は試みとして、高齢者のこれまでに生き抜いてきた経験を生の声で聞かせることが必要だと考えた。そこで高齢者に人生経験や時代背景を授業で語ってもらう機会を設けてきた。その結果、学生の感想は、「大変な時代に生きてきたことをあらためて知った。そのおかげで今の私たちがあるのだと知った。今まで同居の祖父母とはあまり話をしなかったが、この話を聞いて祖父母と話をしたくなった」と、自発的に会話しようとする意思が働いたことが伺える。普段のゲートボールや喫茶店やカラオケで楽しんでいる祖父母の姿からはうかがい知ることができない時代背景を知る。それによって厳しい時代を生きぬいてきたことに対する尊敬の念が生まれて、上記のような感想になった。つまり、前述の３－１で黒井が述べる「重介護を要する高齢者に触れさせる前に、在宅の健康な高齢者と接する」ための教育の機会をカリュキュラムに組み込む必要がある。

3－4　尊厳を支える授業のデザインや課題

若い世代の介護福祉士が老年世代の文化を理解することは、高齢者の生活が昔と別々に存在するのではなく、生活者として一つの彩りに溶け込んだものであることを知らなければならない。介護は社会のしくみや生活環境との相互関係によって展開されるが、介護福祉士はその歴史や文化や地域の彩をもつ生活を尊重しつつ尊厳を支える必要がある。具体的なデザインや課題を挙げてみると次のようなものが考えられる。

①音楽療法を授業に取り入れ昔の歌を覚える
②歌の時代的背景を知る
③一緒に歌い覚えて習う機会を授業に組み込む
④伝承料理を老年世代に習う
⑤伝承料理を老年世代とともにつくって食べる
⑥生活文化史をカリキュラムのなかで論理的に理解できるように組み込む
⑦社会調査、特に高齢者の調査活動を取り込む
⑧学問的基礎体系の中で時代的社会背景を理解させる
⑨介護過程の情報と理解の充実
⑩科目間構図の充実

6 鷲田　2003
7 黒井　2006　149

おわりに

誰もが、受動的な存在や他律的な生き方の老いを望んではいない。介護が必要となっても尊厳をもった自律的で主体的な生き方を望む。社会はそれを支援できる質の高い介護福祉士を必要としている。

介護福祉士制度ができて以来20年を経た今、大きな改正が実施された。厚生労働省では「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」の報告書（2007／7／5）の中で、求められる介護福祉士像として、これからの介護福祉士の人材における目標を打ち出した。また、平成19年12月に公布された「社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律」によると、その定義規定の中で、これまで重視されてきた介護を「入浴・排泄・食事その他の介護」の三大介護から、「心身の状況に応じた介護」へと改めた。新しい介護福祉士の養成教育では、豊かな感性と人間教育を考え、介護過程の展開によるエビデンスに基づいた科学的介護実践力、他職種との連携につなげる力、養成校ごとの自主的カリキュラムによって教育理念や地域特性を出すなどが改正の主な特徴である。

特に各養成校の自主的なカリキュラムが検討され、養成校の教育理念や地域の特性などを生かした運営方法を導入しようとしている。それは逆に、養成校によっては極端な教育格差のリスクも考えられる。各校の自助努力だけに依存することなく制度的に高齢者理解の編成とより高い教育実践を先導する独創性も必要である。そのなかに老年文化の理解は必須である。これらによって施設で担う介護福祉士の資質向上につながり、ひいては施設介護の質の向上につながる。

参考文献

『老いる準備』上野千鶴子　学陽書房(2005)
『老いと障害の質的社会学』山田富秋編　世界思想社（2004）
『老いの空白』鷲田清一　弘文堂（2003）
『介護ライフの社会学』春日典子　世界思想社（2004）
『介護福祉実習指導』介護福祉実習指導研究会　建帛社（2007）
『高齢者の心理が分かるQA』井上勝也監修　中央法規（2007）他
『新社会老年学』古谷野・安藤編著　ワールドプランニング（2003）
『老いるということ』黒井千次　講談社現代新書（2006）